

「情報リテラシー教育」のすすめ：「KITIE」を使った授業の一例

慶應義塾大学信濃町メディアセンター 市古みどり

1．情報リテラシー教育の目標設定

情報リテラシー教育といっても、さまざまなレベル、方法、段階がある。目標を設定するために、大学教育や図書館の変化などさまざまな要素を念慮する必要がある。大学教育の変化としては、大学進学者数、導入教育への関心、生涯学習者、留学生獲得、IT を活用した教育、カリキュラムや教育方法の変化、海外有名大学のアジア進出、大学の自己点検評価などがある。図書館の変化としては、ネットワーク化、電子資料の増加、利用者行動・要求の変化、レファレンス質問の変化、業務の委託化、予算やスタッフの減少などがある。こうした中で図書館は引き続き利用者に貢献できる存在か、学生や教員は何を図書館に望んでいるのか、あるいはこれからの図書館員の役割について考えてきた。その答えが、情報リテラシー教育を図書館の組織目標の中に位置付け、大学教育の中での情報リテラシー教育を展開することが一つの役割となるであろうという結論に至り、「KITIE」を開発し「資料検索法」という授業に取り組んでいる。

2．慶應義塾大学における情報リテラシー教育

慶應の5つのキャンパスの図書館では、図書館の利用法や文献の検索方法の教育に力を入れてきた。1997年、日吉キャンパスでは、新入生全員に対して「情報リテラシー教育入門」を実施することを目標に新たな取り組みが始まった。その経験の蓄積とインターネットが普及した結果、2004年に情報リテラシー教育のためのウェブチュートリアルKITIEの開発が実現した。KITIEは公開後、日吉やSFCで行われている授業やデータベース検索セミナーの補助資料として利用されている。

3．授業「資料検索法」の概要

この授業は総合政策学部および環境情報学部の1年生から4年生までが受講可能である。SFC開設当初から存在していた授業であり、2003年までは図書館・情報学の教員が担当していた。2004年からは図書館員のみで半期2単位の授業を行っている。SFCのカリキュラムは2007年に大幅な改訂が行われた。資料検索法は、「創造支援系科目」の下にある「創造技法科目」の中の「ナレッジスキル」という科目の一つをなすものとなっている。講義概要によればナレッジスキルとは、「SFCでは、問題解決能力のみならず、問題発見能力を磨くことを大きな目標として掲げています。世の中の色々な問題が複雑に絡み合って、その中での本質を見失いがちになるとき、その中から解決すべき問題を発見し、解決する能力が強く求められています。ナレッジスキル科目は、このような要求に答えるために、問題発見から問題解決に至るスキルを身につけるための科目群です（以下省略）」ということで、情報リテラシー教育そのものであると考えられる。また、ナレッジスキル科目は、2007年度以降の入学者においては、3年生から4年生への進級要件（必修単位数：4単位）となっている。授業の目標としては、「大学における学習や研究において、必要な情報に適切かつ効率的にアクセスし、法的・倫理的に正しく入手し、それらを評価し取舍選択しながら活用することができるようになること」とし、自分で考えて判断し行動を起こす力をつけるための「情報リテラシー」を身に付けられるような内容としていくことを目指している。

4．授業のアウトラインと方法

全 13 回の授業は次のとおりである。1 .オリエンテーション、2 .情報の種類と特徴、3 .情報の収集 (1)、4 .情報の収集 (2)、5 .データベース紹介 (1)、6 .資料の入手方法、評価方法、7 .演習課題 1・2 の解説、8 .データベース紹介 (2)、9 .法令・判例の探し方、10 .情報の活用方法、11 .演習課題 3・4 の解説、12 .レポートの書き方、13 .まとめ。講義資料は授業のサイト (<http://info-literacy.sfc.keio.ac.jp>) および学事システム上に掲載し、毎時間終了後に復習的な内容の小テストを実施した。この小テストにはフリーウェアのアンケートシステムを利用した。授業の中で細かいデータベースの使い方はほとんど説明していないが、実習はところどころ取り入れた。演習課題を 4 問作り、さらに最終課題として 5,000 字のレポートを提出させた。期末試験は行わず、出席点、課題の提出により最終評価を行っている。

5 .「資料検索法」の履修者

2007 年度春学期は、1 年生 160 人、2 年生 74 人、3 年生 43 人、4 年生 47 人が履修した。KITIE のプレテストの結果は、A 判定 (全問正解) は 4 人、B 判定 (16-19 問正解) が 32 人、C 判定 (10-15 問) が 84 人、D 判定 (9 問以下) 6 人であった。履修申告前の実施であるので解答数は履修者数より少ないが、この結果は昨年度とほぼ同じであった。毎回の授業出席者数は 200 人から 250 人で、最終レポートを提出したものは 236 人であった。小テストへの解答は毎回 150 人前後であった。演習課題の成績は環境情報学部の 2 年生が最も良かった。最終授業では自己評価をしてもらった。設問は、1 .情報の存在場所に勤がはたらくようになったか。2 .的確なデータベースが選べるようになったか。3 .検索技術が向上したか。4 .検索の結果を評価できるようになったか。5 .検索の結果を活用できるようになったか。6 .資料をきちんと整理できるようになったか。6 .総合評価、というものであった。学生が難しいと考えていることは、データベースの選択、検索結果の評価、資料の整理であった。検索テクニックは向上したと感じているようであった。テクニックは、学生には修得が比較的しやすく、教える側にも苦勞が少ない。学生は資料を活用できるようになったと感じていたが、最終レポートを読む限り、引用をきちんと示しめさず、指定した引用方法に従っていないものが多かった。また、単に自分の考えを一方的に述べたものや感想文が多い、あるいは、調べたことだけを羅列したのも多かった。

6 .「資料検索法」の課題

テキストとしている KITIE に関しては、各章に設けた目標の設定が適切であるか、コンテンツ自体の精査、維持・管理が当面の課題である。KITIE を作成した時には各章に設けた目標について十分な検討をしておらず、今後情報リテラシー教育の評価に踏み込むとすれば、妥当な目標を立てるためにその方法論を教育学の手法から学び、目標を再設定する必要がある。コンテンツについては、情報検索が Google Scholar の浸透などによりますますブラックボックス化することが考えられ、そうした中から利用者が情報を効率的に的確に探し評価する方法について学習できるように改良を加える必要がある。授業を担当することについての課題としては、講師の確保と育成、講師自体が修得すべき教授法、さらに情報リテラシー教育の評価法の研究と評価を実際に行い、授業を改善していく方法を見出さなくてはならない。現在の「資料検索法」の限界は、学生が提出した最終レポートに現れている。レポートの書き方についての指導は他の教員に委ねるしかないが、いずれはそういった授業の中に「資料検索法」が取り込まれ、図書館員と教員との協力関係で授業が成り立つ形となれば、より効果的で図書館員としても取り組みやすくなるのではないかとと思われる。